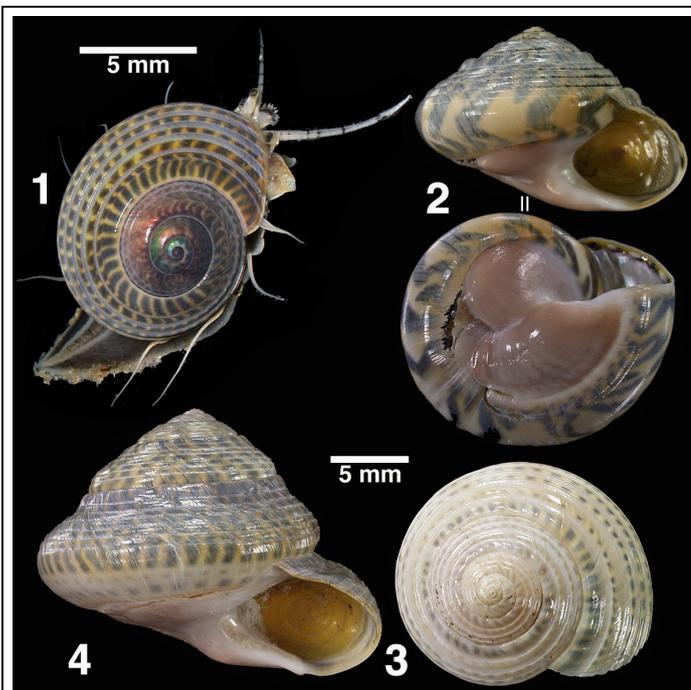


イボキサゴ *Umbonium moniliferum* (Lamarck)

【選定理由】

本種は、内湾奥の砂泥干潟にかつてはごく普通に多産した種で、伊勢湾、三河湾でも 1960 年代には広い範囲で多産した (愛知県科学教育センター, 1967)。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているのが、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。また、汐川干潟のように広大な干潟が残っている場所でも生貝が見られなくなっており (藤岡・木村, 2000)、1990 年代半ばから 2010 年前後までは生貝を全く確認出来なかった。2015 年頃から再び生貝が見られるようになり、三河湾の 3ヶ所では数年間継続的に生貝を確認している。この回復傾向を受けて、前回のランク (CR) からランクダウンするべき種と評価された。



1: 西尾市佐久島, 2017年6月24日, 2, 3: 西尾市一色干潟, 2016年6月3日, 4: 南知多町河和北側干潟, 2017年6月23日, 木村昭一採集

【形態】

殻径約 15 mm の低いそろばん玉型で、殻は厚く周辺は丸い。外洋の砂浜に生息するキサゴと酷似するが、殻が小さく、臍部の滑層が大きい点で区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が確認されているが、個体数は少なく、往時の健全な個体群とは言えず、危機的状況は継続している。

【世界及び国内の分布】

分布域の大部分は日本周辺 (東北地方から九州) であるが、韓国南部にも分布する (木村・山下, 2012)。浜名湖、瀬戸内海中西部には健全な個体群が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように近年生貝が確認できるようになったが、生息場所は限定的で、分断されている。依然として危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10): 31-39.
木村昭一・山下博由, 2012. イボキサゴ, p. 17. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)